

1 平成30年度稲作推進の基本方針

平成29年度の稲作は、7月まで順調な生育であったものの、8月上中旬は日照不足・低温であったことに加え、仙台では降雨が36日間連続するなど登熟期の気象条件には恵まれなかった。作況指数は99で平成21年以来の「平年並み」の作柄となり、1等米比率（うるち玄米）については、充実度不足等の落等要因により、83.5%（平成29年11月末日現在）と東北六県の中では本県のみが90%を下回り、高品質米の安定生産が依然として大きな課題となっている。

流通・販売においては、平成27年産米以降、3年連続で過剰作付が解消されたことにより需給バランスは大幅に改善され、米価は回復基調にあるものの、平成30年度から国による生産数量目標の配分が廃止されるなど、米を巡る情勢は予断を許さない状況にあり、業務用米等も含め需要に応じた米づくりが必要になっている。また、近年、米の主産県では良食味を謳った新品種がデビューし、有利な販売を目指そうとする取組が各地で動き出しており、ブランド化競争が激化している。

このような状況を受けて、みやぎ米ブランド化戦略会議では、高価格帯の銘柄米と位置づけ平成29年11月にプレデビューした「だて正夢」、健康ニーズに対応した玄米食向け品種「金のいぶき」を戦略的に導入し、主力品種である「ひとめぼれ」、「ササニシキ」とともに、「みやぎ米」の認知度向上を図り、「米どころ宮城の復権」と“生産者が自信と誇りを持つみやぎ米づくり”を実現する「みやぎ米ブランド化戦略」を平成29年7月に策定した。また、宮城県米づくり推進本部では、日本穀物検定協会による食味ランキングでの「特A」奪還に向けて、平成29年4月以降、「食味レベルアップ」重点技術対策に取り組み、米の主産地としての評価向上を関係機関・団体と一体となって推進している。

そこで、平成30年度の稲作に当たっては、「新たな「みやぎ米」の創出による販売・ブランド力の強化」、「品質・食味向上と安定生産に向けた技術対応」を最重点課題として、以下の項目について行政及び農業関係機関・団体が一体となって取り組んでいく。

2 平成30年度稲作推進の重点推進事項

(1) 新たな「みやぎ米」の創出による販売・ブランド力の強化

イ 新たな「みやぎ米」の創出

- ◆ 「ひとめぼれ」、「ササニシキ」、新品種「だて正夢」、玄米食向け品種「金のいぶき」をみやぎ米の柱とし、食卓シーンに合わせた銘柄選びを消費者に訴求し、首都圏中心に認知度向上・販売拡大を図る。
- ◆ みやぎ米ブランド化戦略会議、宮城県米づくり推進本部の活動をとおり、関係機関・団体との連携により「みやぎ米ブランド化戦略」を推進する。
- ◆ 実需者の多様なニーズに対応した契約栽培（播種前、収穫前、複数年契約）の更なる拡大の推進と県内外へのPR活動を展開し、みやぎ米の早期全量販売を目指す。

ロ 新品種の戦略的導入

- ◆ 本格デビュー年を迎える「だて正夢」については、良食味米生産とブランド構築により、消費者・実需者の評価を確立し、高価格帯の銘柄米に育成する。
- ◆ 「だて正夢」の生産は、生産団体と生産者の登録制とし、栽培塾の開催や栽培マニュアルの遵守により、良食味米生産を図る。
- ◆ 中食・外食等の需要に応える業務用米新品種の開発や選定を推進する。

ハ 特色ある米を生かした新たな需要の創出

- ◆ 玄米食向け品種「金のいぶき」は、試食会や広報活動の展開により需要創出と販路開拓を支援し、ブランド構築を図る。
- ◆ 「金のいぶき」の生産は、生産団体と生産者の登録制とし、栽培塾の開催や栽培マニュアルの遵守により、安定生産を図る。
- ◆ 地域が取り組む特色ある米づくり（品種活用、食味向上によるブランド化等）の活動を支援する。
- ◆ 酒造団体との意見交換をもとに、酒米の新品種導入を検討する。

二 輸出への取組支援

- ◆ 輸出先を明確にした販路の開拓を支援するとともに、輸出先の需要に対応する生産流通体制整備の検討を行う。

ホ 宮城米の消費拡大

- ◆ おいしい「宮城米」米飯提供店及び宮城米推奨店への登録店を拡充し、宮城米の販売を促進する。
- ◆ 地産地消、学校給食及び食育素材として、宮城米の利用を促進する。

(2) 品質・食味向上と安定生産に向けた技術対応

イ 高品質・良食味米の安定生産技術の普及

- ◆ ひとめぼれ「特A」獲得のための重点技術対策（①生育量に応じた適正な肥培管理の実施，②登熟向上に向けた水管理の実施，③出穂後の気温等に基づく適期刈取の励行，④良食味米に仕上げる乾燥調製の徹底）に「⑤土づくりの実践による地力向上・持続的な米づくり」，「⑥晩期栽培による食味向上及びリスク分散」を加え，継続した取組を行う。
- ◆ 晩期栽培等による作期分散の推進と適正な栽植密度，肥培管理等により，「登熟期間の光合成能力を高く維持する稲づくり」を行い，登熟期の高温や日照不足による品質低下の回避を図る。
- ◆ 適正な水管理の徹底と用水確保の合意形成を推進し，品質向上を図る。
- ◆ みやぎ米の安全・安心への信頼回復を図るため，放射性物質検査を継続して実施するとともに，検査結果を公表して周知する。また，放射性物質の吸収が懸念される地域については，カリ肥料の施用等吸収抑制に有効な耕種的対策を徹底する。

ロ 土壌診断に基づく適正施肥と耕畜連携による土づくり

- ◆ 土壌診断に基づいた土づくり肥料，有機物（たい肥等）の適正な施用，適切な耕深の確保，排水改良対策により，高品質・良食味米の持続的な安定生産を図る。
- ◆ 震災からの復旧水田においては，地力の低下等により収量・品質の低下が課題となっていることから，有機物（たい肥，稲わら，緑肥等）の施用の支援を行い，早期の生産性回復を支援する。

ハ 病虫害防除及び鳥獣被害防止対策の徹底

- ◆ 「斑点米カメムシ類」及び「その繁殖源となる水田雑草」の適正な薬剤防除を徹底するとともに，ほ場周辺の牧草地や河川堤防における耕種的防除（適期草刈り）を徹底するなど地域レベルの病虫害防除徹底を図る。
- ◆ 採種ほ周辺では，「イネばか苗病」の発生を特に防がなければならないことから，関係機関での連携をすすめ，化学合成農薬での種子消毒，塩水選実施，適正な種子予措・育苗管理等による防除対策を徹底する。
- ◆ 鳥獣被害を防止するため，侵入防止柵の設置や有害鳥獣捕獲，農地周辺の刈払い等による出没しにくい環境づくりを推進する。

(3) 所得拡大に向けた省力・低コスト稲作等の推進

イ 直播栽培の取組拡大

- ◆ 直播技術資料の整備・活用，栽培技術研修会の開催，普及展示ほの設置，直播対応機械の導入支援等により，栽培技術の向上と取組面積の拡大を推進する。

ロ 水田農業の大規模化に対応した米づくりの推進

- ◆ 「晩生品種の導入」や「移植と直播の組合せ」など大規模な米づくりに対応した技術体系を推進する。
- ◆ カントリーエレベーターやライスセンター、高性能農業機械（大型トラクターや直播機等）の効率的な利用を促進するとともに、肥料・農薬等資材の効果的な施用を推進し、生産コストの低減を図る。
- ◆ ICTによる生産管理システムや環境センサー等を活用した現地実証の取組等により、大規模農業法人等における新たな省力・低コスト稲作農業の展開を推進する。

ハ 飼料用米の推進

- ◆ 米市場の需給安定化に向けた飼料用米の生産の維持に向け、飼料用米栽培マニュアルの活用等により、各種病害虫対策の徹底やコスト低減・増収のための技術支援を行う。
- ◆ 飼料用米専用品種の取組増加に伴う、主食用米へのコンタミ防止や種子の安定供給に対する支援を行う。

(4) 環境に配慮した宮城米づくりの推進

イ 環境保全米取組運動の推進

- ◆ JAグループが取り組む環境保全米取組運動を支援し、環境保全米の作付拡大を支援する。併せて、環境保全米に対応した直播栽培技術の導入支援を行う。
- ◆ 生きもの調査や生産者と消費者の交流機会、各種イベント等PR活動を推進し、「みやぎの環境保全米」の取組に関する理解を深め、販売促進に繋げる。